

日本文学会ニューズ

一九九四年

会長 彦坂佳宣

今年度は日本文学会の四〇周年にあたります。三月に刊行された第61号がその記念号でした。

この号には、十一月の四〇周年記念講演でお話のあった、初期の教員として今日の立命館日本文学専攻の基礎をきづかれた先生方の人となりと学問についての文章がのっており、また、かたわらで親しく接し、また教えをうけられた、これもわれわれの先輩の手になる先生方の講演をもとにした文章です。他に、今までの総目録と年表なども掲載されて、今までの成果を振り返ることが出来ます。そして、この糧を今後どう生かすかという言葉が、記念号の初めにも終わりに記されています。

区切りの感のあるのは、日本文学会だけのことではないようです。昨年この欄にも大学でのセメスター

制度の導入のことが書かれていましたが、今年から大学院も二回の入試となり、来年からは推薦入試も加わります。大学院では課程博士も何件か出始めました。

文学部では、まもなくインスティテュート構想が発足します。これは、従来の専攻制に新たに学際的な部門を加えるもので、学生が相互乗り入れ的に単位を取得することが出来るようになります。学生にも教員にも、ますます自覚的な学習意欲や学問構築の姿勢が要求されることになるでしょう。従来の専攻と新部門との、魅力づくりの競争も始まるかもしれません。

これを要するに、どうやら学問の世界も経済の世界でいう価格破壊に似て、新規巻き直し、もつと言えば一種の戦国時代に入ったかのように思えます。

そこで結びとしては「今後の行方をじっくり見守りたい」と書くところ

ろでしょうが、そんなのはいやです。私見では「学者・研究者・教員・などという既得権に依存しがちな身分から心を解き放ち、みなさん、戦国時代を我がもの顔で乗り切りましょう」と言っておきましょう。穏健なる皆様、わがまま言っつてすみません。